建設時評

過去と未来

東北大学 災害科学国際研究所
准教授 平野勝也

人の記憶システムはなかなか興味深い。いわゆる記憶のことを表す長期記憶では，記憶システムに情報を書き込む「記銘（符号化）」，その情報を維持する「保持（貯蔵）」，その情報を記憶システムから取り出す「想起（検索）」という大きく３つのプロセスが稼働していると言われている。

人は膨大な情報を記憶しているのだが，コンピューター内の文書のように全ての情報が平等に扱われているわけではない。コンピューターだと検索範囲が大きくなれば大きくなるほど，検索に時間がかかるのは当たり前であるが，人の記憶システムでは，頻繁に使う情報は想起しやすいように保持され，あまり使わない情報は記憶の奥底に仕舞い込むという方法により日常の情報処理を迅速化しているのである。したがって，記憶の奥底にある情報はなかなか思い出しにくい。例えば，小学校１年生の頃，何をして遊んでいたか，たくさん思い出す（想起する）のはかなり難しいと思われる。しかし，不思議なことに，当時遊んでいた場所に行くと，色々な当時の情景が思い浮かんでくるものである。つまり，「想起（検索）」システムは，環境を「手がかり」にすれば，記憶の奥底にある情報でも取り出しやすくなる仕組みを持ったシステムだということだ。「人は環境との結びつきで生きている」と言われるが，記憶システムも環境に依存して効率化したシステムとなっているのである。

では，小学校１年生の頃，遊んでいた場所が大きく様変わりしていたらどうだろう。その場所を訪れても，「手がかり」を失い，あまり情景は浮かんでこないのではないかと思われる。環境に依存した記憶システムである限り，環境が変わってしまうと思い出せるはずの情景も思い出せなくなってしまう。

＊　＊　＊

環境と記憶が絡んでくるのは，上述したような個々人の話だけではない。「同じ釜の飯を食う」という慣用句がある。「同時」に「共通の環境」に身を置いた体験（記憶）を持つことが，他人との距離を縮めることの表れであろう。さらに言えば，他人との距離を縮めるには必ずしも「同時」である必要はない。高校の同窓会を考えてみよう。世代が多少異なっても，例えば「音楽室は冬寒くて大変だった」と言った時間を超えて共通する話題に花が咲き，距離は縮まっていくものである。では校舎が建て替えられてしまっていたらどうだろう。「私の時は冬でも音楽室は暖かかでした」と返した途端，話は終わってしまう。これは街でも同じことが言える。普通「同郷」というだけで親近感が湧くものであるが，例えば，筑波研究学園都市になる前の桜村出身者と筑波研究学園都市が開発されてからのつくば市出身者は「同郷」ではあるのだが，どこまで話が噛み合うだろうか。「同郷」であることによって距離が縮まるのは，そこかしこの街角と言ったいくつもの場所の共有による力によるものであり，身を置いた環境の共通性に大きく依存している。

＊　＊　＊

つまり，「街（環境）」とは，手がかりとして個々人の豊かな過去を思い出させ，「共通の環境」を多くの人に提供することで，人と人との結びつきを強くする装置なのである。その装置としての機能は，街の環境が時代を超えて変わらなければより強いものとなることは自明であろう。まちづくりにおいて歴史が重んじられるのは，こうした理由である。歴史的建造物の文化財的価値だけの問題ではないのだ。あらゆる環境そのものが人々をつなぐ大切な機能を担っているのだ。もちろん，住んでいる人々にとっては，当たり前すぎて全く自覚していないことに留意は必要ではある。そして，人が作ったものには耐用年数がある。それがあるかぎり，街は変わりゆくものであるし，時代とともに様々な新しい何かを持たせるために変化するのが街である。したがって，街の変化を否定する気は毛頭ないが，変化の速度とそのばらつきが，街を考える上では大切だと思っている。山河と言った自然環境が悠然とあり続け，時代時代の良き建築物があり続ける。そして変わるものは代謝していく。いつしか街は様々な時代時代に彩られた重層性を持ったものとして深みを増していくのである。その歴史の積み重ねが街にとっては大切なのだと考えている。

こうしたことは，環境との結びつきが強い住人としての視点だけでなく，旅行者のような他所者目線にも街の「深み」や「面白さ」として認識されるものだと考えている。弘前，金沢，京都など空襲を受けなかった街を訪れる度にその想いは強まる。圧倒的に，街が面白いのだ。筆者の住む仙台は，焼け野原にされ，急激な変化をせざるを得なかった。戦前の建物はほとんど残っていない。そして，仙台の戦災復興区画整理は，大手筋である大町通りと奥州街道である国分町通りが旧来の姿のまま残されたという歴史の継承を意識した他の戦災都市と比して特筆すべき区画整理設計ではあるのだが，それでも一時期に急激に再建した事による「歴史の断絶」を感じるのだ。もちろんそれも仙台の歴史ではあるのだが。

＊　＊　＊

筆者はおよそ10年，石巻市・女川町を筆頭に東日本大震災からの復興の手伝いに奔走してきた。津波によって多くの建物が流され，多くの街で急激な変化が起こってしまった。その絶望的な状況から，「過去」の多くを失った街の「歴史の断絶」をどれだけ小さくできるかが勝負だと思い取り組んできた。そんな中で，見えた希望の光は，「未来」だった。「未来」とは，絶望的な状況から，愛する街のために，そして自分のために再び借金を背負ってでも投資をして，その街で生きて行こうと覚悟を決めた人々である。街そのものに魅力があり，多くの人が訪れる発信力ある街として再生しなければ，自分の生業も危うい。街のため自分のために本気で議論し，本気で現実的で輝かしい街の「未来」を描いて行った。覚悟を決めた人は強い。街の原動力はそうした覚悟を持った人々なのである。原動力無くしてその街の「未来」は創られないのである。学者らしからぬ情緒的な物言いをすると，まちづくりの本質はその街の「過去と未来」にあるのだ。大切な「過去」の多くを失った街に希望が見えたのは，「未来」を創る人々がいたからである。

＊　＊　＊

福島県双葉町の原子力災害からの復興を手伝うことになった。実は，女川町の復興の最前線で活躍し続けた女川町職員が，女川町の復興事業が概成したことを機に，今度は自分が手伝う番だと志願して，この春から双葉町の職員として復興を進めているのだ。筆者が全幅の信頼を置くそんな彼から手伝って欲しいと請われたら断る理由など何もない。二つ返事でOKした。

女川は「過去」の多くを失ったが，「未来」があった。双葉には，あの日急いで避難したまま残された建物という「過去」がある。しかし，現時点での住民はゼロであり，「未来」はまだないのだ。当初は女川とは真逆の状況だと思っていたのだが，やはり原子力災害は難しい。双葉町役場職員の案内で現地に行ってみると，あると思っていた「過去」も，多くの建物が10年を超える長きに亘りイノシシなどの野生動物や火事場泥棒に荒らされて傷みが進んでおり，心許ないものになっていた。帰還意向も心許ないと聞く。そして，「加害者」への複雑な感情も渦巻いている。そんな中でも，「過去」を大切にしながら，「未来」を創る覚悟を持った人々をどれだけ増やせるのか。新たな挑戦を始めたいと思う。まちづくりの本質は「過去」と「未来」にあるのだから。